



## 元気です

February 2004

尻別川の未来を考える  
オビラメの会

### 春には満1歳 人工孵化の尻別イトウたち

昨年5月9日に「オビラメの会」として初めて人工授精に成功し、移送先の北海道立水産孵化場（恵庭市）で誕生したイトウたちが、水槽の中で元気に育っている。

同孵化場主任研究員の川村洋司さんによれば、イトウたちの現在の体長は6～7センチ。「採卵のタイミングが合わなかったせいか、受精卵の大半が死卵だったり、孵化直後に死亡したりしたので、残った稚魚50匹たちも、いったい何匹が無事に育つだろうかと少し心配だったのですが、浮上（お腹のサックの栄養を吸収し終えた後、自力で餌をとり泳ぎ出すこと）してからはみんな、とても丈夫です」。

ただ、川村さんは「何世代も続けて養殖しているイトウと比較すると、成長スピードはちょっと遅いかも知れない」とも。

この50匹あまりは生まれたときから水槽育ちだが、両親はれっきとした尻別川産の野生魚。そのせいか、子供たちも警戒心がめっぽう強く、生けすのハマチみたいに給餌すればするだけどんどん食べまくる、というふうではないらしい。

この子どもたちが、もしこんなふうには野生を忘れないでくれるのだとしたら、頼もしい限りだ。

現在は60センチ水槽で全員一緒に飼育中だが、国内最大のサケ科魚類だ



元気に泳ぎ回るイトウ稚魚たち。  
2004年2月19日、川村洋司さん撮影

けあって、やがて手狭になることは必至。今秋にも野外の飼育池（二セコ町内などを検討中）に移送する計画だ。

### イトウの幼魚捕獲に成功！ 事務局次長の高橋秀邦さん

2003年11月18日、オビラメの会事務局次長の高橋秀邦さん（倶知安町在住）が、同町内を流れる尻別川で体長約23センチのイトウ1匹を捕獲することに成功した。雌雄は不明。

イトウ飼育池の管理責任者を務める高橋さんは、飼育中の親魚たちの冬ごもりを前に、数日前から川に出掛けてイトウの餌となるウグイの捕獲作業を続けていたが、この日、ウグイ数十匹をすくった網の中に、ウグイとは異なる魚体を発見。すぐにイトウと判定して、傷つけないよう注意を払いながら

アユ釣り用のオトリ缶に保護した。

高橋さんは2000年秋以降、これまでに尻別川で3匹のイトウを釣り上げ、飼育池への搬送に成功しているが、これら3匹と、川村洋司・北海道立水産孵化場主任研究員らが尻別川で1999年夏に生け捕りにした1個体は、いずれも1997年春に誕生した魚たちと推定されている。

つまり尻別川ではこの時期、少なくとも1度のイトウの自然繁殖が成功し

ていたと考えられているのだが、今回捕獲された魚は、サイズからみて2～3歳。とすると、2000年か2001年にも、尻別川で野生イトウが繁殖に成功していたことを示す証拠になるかもしれない。

このイトウは同25日、同孵化場に移送され、水槽内で生き餌を与えられながら（警戒心が強く、人工餌は口にしないという）元気に過ごしている。

### 2000年ごろ自然繁殖成功の証拠？

# 「環境との調和に配慮した 事業実施を基本にしたい」

オビラメ復活30年計画を進める「オビラメの会」は、尻別イトウ復活の最初の拠点として、倶知安町内を流れる倶登山川（尻別川支流）の自然環境復元を目指しています。昨年11月、関係行政機関に提出した要望書に対して、このほど北海道後志支庁の片平美智子支庁長と倶知安町の伊藤弘町長から、それぞれ回答書が届きました。

要望した「イトウの遡上を阻んでいると考えられる河川構築物の撤去」などについて、具体的な言及はなかったものの、今後の河川管理や工事に際しての「オビラメの会」との連携に前向きな答えがありました。

「オビラメの会」は今後、倶登山川の様子をより詳しく踏査し、改善すべき地点のリストアップなどを通じて、具体的な対策を提起していく方針です。

## 「オビラメの会」の要望ポイント

1. 倶登山川におけるオビラメの遡上・降下を阻害する堰堤工の落差解消。
2. 農地からの土砂流入防止対策。
3. 連続した河畔林の整備。
4. その他オビラメ復活に必要な対策。
5. 倶登山川に限らず、尻別川流域全域におけるオビラメの会との連携体制の確立。

拝啓 厳寒の候、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

日ごろから、道政の推進につきましては、格別の御協力をいただき、誠にありがとうございます。

さて、先日お寄せいただきました「倶登山川におけるオビラメの遡上・降下を阻害する堰堤工の落差の解消」についてですが、現在経済部林務課では倶登山川及びその流域においてオビラメ等魚類の遡上・降下を阻害する施設の設置はしていませんが、原則として常水のある河川及びそれらの付近での工事を行う場合は、それぞれの状況に応じた施設の計画としてまいります。

次に「農地からの土砂流入防止対策」についてですが、農家の方々に対する営農指導として、水田の代掻きの際、排水しないこと等の指導を様々な機会を利用して行っているところですが、今後も引き続き同様の指導を実施してまいります。さらに、農業振興部整備課では、倶登山川及び流域で実施（道営事業）している工事はありませんが、基本的に河川並びに排水路整備を実施する場合は状況に応じて沈殿砂などの汚濁防止施設を設置し、水質汚濁を極力防ぐこととなっております。また、その他の工事を実施する場合でも周辺に河川等があり、土砂の流入が予測される場合は、河川環境に孵化を与えないように十分注意して工事を行うこととしています。今後とも工事の実施に当たりましてはこの考え方に則り、環境との調和に配慮しつつ工事を進めます。

道では、水質汚濁防止法に基づき公共用水域及び地下水の水質の汚濁の状況を常時監視しており、尻別川については、測定計画を毎年定めて地域政策部環境生活課で調査を行っております。

なお、後志支庁では各課の事業計画をホームページに掲載しておりますので、その情報を基に、必要に応じて、貴会からお問い合わせをしていただきたいと思います。

- ・ 林業関係 (<http://www.shiribeshi.pref.hokkaido.jp/si-rinmu/accountability.htm>)
- ・ 農業関係 (<http://www.shiribeshi.pref.hokkaido.jp/si-noumu/account/shiribeshi/top.html>)
- ・ 水産関係 (<http://www.shiribeshi.pref.hokkaido.jp/si-ssan/acountability.htm>)

今後とも道政に対する御協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、時節柄御自愛のほどお祈り申し上げます。

敬具

平成15年12月10日

尻別川の未来を考える オビラメの会  
会長 草島清作様

北海道後志支庁長 片平美智子

尻別川の未来を考える オビラメの会  
会長 草島清作 様

俱知安町長 伊藤弘 (印)

要望書の回答について

初春の候、貴職におかれましてはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平成15年11月20日付、要望のありました内容について、別紙のとおり回答いたします。

#### 要望書回答

イトウ(オビラメ)の生息環境について、俱登山川に対するご要望がありましたことにつきまして、次のとおり回答させていただきます。

俱登山川の内、ポイントサン川合流点から上流の町道北9線高見出雲線、北九線一号橋までの区間は、特に農地が隣接している区間で、過去に浸水等農地に対する被害が多く発生していたため、土地改良事業での改修を要望し、昭和44年から昭和50年(1969-975)にかけて、小樽開発建設部により国営直轄明渠排水事業として改修した区間であり、延長は2,020m、現在は俱知安町の管理受託区間となっています。

当時の主な事業内容：

- (1) 延長 2,020.00m 敷巾 16.00m、1.39mの区間 1,800m  
敷巾 5.50m、推進1.31mの区間 220m
- (2) コンクリートブロック敷設による護岸  
落差工4基(落差0.7-1.5m)

管理受託区間内における、俱知安町が行う土地改良事業、或いは河川改修計画等については、今のところありませんが、町が管理する河川のうち、俱登山川上流、高見川護岸工事(L=200m)及びクトサン4号川護岸工事(L=30m)について、地先からの要望で町単独費での予算を要求しておりますが、予算化は難しい状況にあります。(布団籠による土留工を予定)

町管理以外の河川につきましては、地域住民からの改修・改善要望が強く求められた場合には、国又は、道に要望していく可能性はあります。

#### 1. 俱登山川におけるオビラメの遡上・降下を阻害する堰堤工の落差解消

現在、管理受託区間には4基の落差工がありますが、落差解消をするための町単独の事業計画はありません。

#### 2. 農地からの土砂流入防止対策

当区間は、農地と川までの距離が近いので、土砂流入が生じるものと思われませんが、現在の農地の利用状況としては、降雨等の自然状況による不可抗力によるものと推測します。目に余る状況が生じた場合には、地域関係者(土地所有者)との協議対策となります。

事項3.の河畔林を整備したり、土砂溜め工の設置も有効な手段ではありますが、町単独の事業としては、大変難しい状況です。

#### 3. 連続した河畔林の整備

2.の回答と同様であります。

#### 4. その他オビラメの復活に必要な対策

現状で特に必要な対策としては考えていませんが、オビラメに限らず生物の生態・生息環境等に考慮した対策につきましては、今後河川改修等工事を伴う事業を行なう場合、「環境との調和に配慮した事業実施」を基本として行っていくとの考えであります。

#### 5. 俱登山川に限らず、尻別川流域全域におけるオビラメの会との連携体制の確立

貴会のみならず、流域で生活する人達の意見を必要に応じ、今後とも伺って参りたいと存じます。その際は、情報等の提供を宜しく願いいたします。

**御愛顧感謝**

オビラメウェブサイト でニューズレターを一気読み！  
<http://homepage3.nifty.com/huchen/Obirame/index.html>

## オビラメ勉強会レポート

### 「重点河川」復活プラン をつくろう！ Part 2

昨年12月13日午後、ニセコ町民センターで第14回オビラメ勉強会「重点河川復活プランをつくろう！ part 2」が開かれました。10人あまりが参加し、俱登山川再生をテーマに意見を交わしました。ダイジェストでお伝えします。

(まとめ・平田剛士)

# ボクらで「世界初」をやり遂げたいですね

**岩瀬晴夫さん**（オビラメの会会員、応用生態工学会普及委員）

川の復元工事があちこちで始まっているのですが、室内実験ではうまくいっても、動的な攪乱があるホンモノの現場では、なかなか想定通りにいきません。フィールドを目の前にしたら、「とりあえずやってみよう」「やってみなけりゃ分からない」としかならないんですね。

**吉岡俊彦さん**（オビラメの会事務局局長）

それでも、何もしないよりは、やれることをやって、アピールしないといけないんじゃないかなと思います。流域の人に「イトウ保全のために治水工事を抑制するなどして）少しぐらいの水害があってもしょうがない」と思ってもらわないとならないわけだから。

**岩瀬さん** 俱登山川の再生を目指すことを決めたわけですが、堰堤が親魚の遡上を阻害しているのは確かとして、それ以外の問題点はなんなのでしょう？ たとえば、泥が繁殖の障害になるかも知れない、とのことですけど、秋にサケなりサクラマスなりの発眼卵をファイバーボックスに入れて川床に仕掛けて、孵化するかどうか、実験してみたらどうですか。

**草島清作さん**（オビラメの会会長）

泥は問題ですね。現在でも、魚影の濃い川というのは上流に森林が非常に濃いです。「イトウは森の魚」といわれる由縁ですが、森のおかげで泥が食い止められている。

**鈴木芳房さん**（オビラメの会会員、水中写真家）

俱登山川の再生を、これからどういう段取りでやるか、ということを決めていかないと。リストアップを整理が必要ですね。

**沼田雄一さん**（公務員）

役所ってというのは要望書を受けて初めて動き出します。だから今回、要望書を出したのはよかったと思うんです。ただ次のステップで、たとえば川に泥を流さないように流域の農家に「指導」してもらおうと思ったら、理由付けが大事です。といて、農家とはケンカすべきじゃないと思う。農家に理解してもらえるように、たとえば俱登山川の土砂のたまっているようなところ、オビラメのみんなで自力でどけるようなことをやってみたらどうでしょう？

**吉岡さん** そういうことを続けていく意味はあると思いますね。確かに、何か裏付けがないと第三者には納得してもらえない。裏付けを100%解明



俱登山川の様子（2003年9月7日、吉岡俊彦撮影）

していくのは容易ではありませんが、ある程度は推測に過ぎなくても、「オビラメに託してくれ」と訴えていくしかない。

**藤盛聡さん**（オビラメの会会員、会社員）

稚魚をどうするか、親魚をどうするか、川をどうするか。いっぺん交通整理をやりたいですね。どれも難しい問題だと思うけれど、なんとか僕らで「世界初」をやり遂げたいですね。（笑い）



## イトウ保護連絡協議会

イトウ保護連絡協議会は、「オビラメの会」をはじめ、イトウ保護を目指す道内の団体でつくるネットワーク組織です。情報交換や、グループ同士の親睦を深めるために用意されたメーリングリストに、どうぞお気軽にご参加下さい。

お問い合わせやお申し込みは同協議会ML管理者PXN04427@nifty.com（平田剛士、オビラメの会広報担当幹事）まで。

イトウたちはいま——最新情報満載！

イトウ保護連絡協議会ウェブサイトをご活用下さい。

<http://homepage3.nifty.com/huchen/itou-net/index.html>

「尻別川の未来を考える オビラメの会」は、イトウ保護連絡協議会ウェブサイトにてサーバーを提供しています。

# 検討委員会「イトウ繁殖環境の喪失は必至」

防衛施設庁によるダム建設がイトウ繁殖地を直撃している道東の別寒辺牛川について、事業の妥当性を再チェックする「矢白別演習場・別寒辺牛川水系土砂流出対策等検討委員会」(新谷融委員長)の第3回会合が昨年11月7日、釧路市内で開かれました。初めて傍聴が認められ、委員たちからは、ダムによる環境破壊は明らか、とする意見や、目的とされる「砂防」についての当局の評価に対する疑念、ダムのスリット化・水門化の提案など

が相次ぎました。

委員会は今年6月に中間報告を出す方針です。このダム事業に対して、「オビラメの会」は昨年2月、ダム建設の凍結や第三者機関による環境調査などを求める要望書を、札幌防衛施設局長と地元・厚岸町長に送りました(オビラメニューズレター13号参照)。ダム事業が中止され、別寒辺牛湿原の保全が果たされるまで、イトウ保護連絡協議会とも連携しながら、注意深く見守っていきます。

## 討議の概要

### 魚道の機能評価及び機能向上対策案について

- ①イトウが魚道下段を遡上して産卵していることは事実であるが、中段、上段となれば遡上距離が長くなるため、イトウは上らなくなり、魚道として機能しなくなるのではないかと。また、ダムによる堆砂と水位上昇とによって上流の産卵床は失われると考えた方がよい。
- ②ダムによる河床環境の変化により、イトウだけではなく、すべての魚類についてどのような影響が出るか、これから考えていかなければならない。
- ③魚道部分を樹林化しても、堆砂域は水深が浅いため、水温上昇を防ぐことはできない。また、ダムに堆積した土砂が落葉等とともにヘドロ化することが考えられることから、水質調査が必要である。
- ④魚道の中、上段の高さに堆砂するまでにどのくらいの年数がかかるのかを試算する必要がある。
- ⑤遡上・降下調査については、調査の時期を逸した。適期に調査を行うとともに自動撮影などの調査方法も検討し、調査体制を整えるべきである。
- ⑥イトウの遡上・降下だけではなく、ダムがイトウの繁殖・生育にどのような影響を与えるのかということも含めてどのように改善すれば良いのか、複数の対策案を検討する必要がある。例えば、魚道の下段のレベルでダム構造を改良するという考えもある。

### 別寒辺牛川水系の流域特性について

- ①別寒辺牛川水系の各河川の流域界を明確に示すとともに、航空写真による情報を整理して詳細な解析を行ってほしい。
- ②上空からの視察では土砂が流出しているという実態は認められなかったが、50年確率の降雨があった場合、どのようになるかを予測しなければならない。
- ③別寒辺牛川水系の支流は、枝沢の先端まで自然が残されているので、手を加えないでほしい。
- ④演習場を含む流域と湿原とのかかわりが現状としてどのようになっているか判断できるよう分析を進めてほしい。

### 札幌防衛施設局のサイトから抜粋

- ⑤湿原の存在が流出土砂のバッファゾーンとなっている。
- ⑥産卵床調査において現地踏査したところ、着弾地から土砂が流出した痕跡は確認されなかった。
- ⑦装軌車道の裸地部が土壌凍結により、融雪時に流出して浸食を起こすことが考えられることから土壌凍結調査が必要である。
- ⑧厚岸湖の干潟を維持するには陸からの土砂の流入が必要との考えもあり、計画規模の流出土砂を完全に止めることについては疑問がある。

### 土砂流出に関する評価について

- ①ダムのみを対象として評価する場合は掃流砂量のみ算出で良いが、流域全体、干潟のことも含めての議論等をするのであれば、浮遊砂量等もきちんと計算し、提示すべきである。
- ②実態に基づいた生産土砂の情報が整理されて初めて土砂流出予測につながるため、生産土砂の情報について再度整理する必要がある。
- ③流量については実測値と計算値との相関関係を説明しているが、流砂量についても計算値と実測値の相関関係を確認すべきである。
- ④演習場内からの土砂生産・流出の参考として周辺地域での砂防ダムを含めたダム施設の堆積実績を調査して、計画規模の降雨があった場合の土砂流出予測をする必要がある。

### 土砂流出対策工法の事例

- ①ダムによって土砂を捕捉するという仕組みそのものについての評価を考える時期がきていると考えられる。
- ②トライベツ川のダムをスリット化あるいは水門式とすることが考えられる。
- ③装軌車道の裸地部については、その場所で土砂の流出防止対策を行う方がよい。

## 今年も「オビラメ」 を強力サポート

「オビラメの会」を経済的に支援し続けてくれているパタゴニア日本支社（鎌倉市）が、2004年度も「オビラメの会」を助成することを決定し、このほど60万円の助成金が「オビラメの



パタゴニア日本支社のホームページ

## パタゴニアが60万円を助成

会」の口座に振り込まれた。

パタゴニア日本支社のウェブサイト ([http://www.patagonia.com/japan/enviro/enviro\\_grants.shtml](http://www.patagonia.com/japan/enviro/enviro_grants.shtml)) によると、同本社（米国）は1985年から、環境問題解決に取り組む市民活動への支援策として、税引き前利益の10%を草の根運動の環境活動グループに寄付する「環境助成金プログラム」事業を開始。現在も「売上の1%もしくは税引き前利益の10%、いずれか多い金額」を市民グループなどの援助にあてており、これまで「1800万ドル以上を1000以上のグループに寄付」してきたという。

「オビラメの会」は2002年度から連続して同プログラムの支援を受けているほか、2002年夏には、オビラメの会会員で同社大阪ストア勤務の玉井秀樹さんが同社の「環境インターンシップ制度」（社員を有給でボランティア活動に派遣する制度）を利用してニセコ町に長期滞在し、イトウ親魚の飼育などに力を尽くした。また「オビラメの会」は、同社大阪ストアからも寄付金を受けている。

「オビラメの会」の草島清作会長は「本当にありがたい、その一言です。夢の実現にいつそう力を尽くしたい」と話している。

## 新しいリーフレット、できました。

「オビラメの会」の新しいリーフレットが完成しました。尻別川に生息する野生イトウ個体群が絶滅の危機に瀕している状況を訴え、「オビラメ復活30年計画」など会の活動を紹介するとともに、手にとって下さる多くの人たちにいつそう関心を深めてもらい、また支援をお願いする内容です。イトウを撮影した美しい写真は、水中写真家で「オビラメの会」会員の鈴木芳房さんが提供してくれました。

パタゴニア日本支社、コンサーベーション・アライアンス・ジャパンなどからの支援金を活用し、1万部を制作しました。全国の同社店舗や道内の博物館・動物園、イトウ保護連絡協議会加盟各団体などに配布をお願いする計画です。

「オビラメの会」会員のみならず、リーフレット各5部ずつお届けするほか、身近な場所で配布にご協力いただける方には、送料無料でお届けします。必要部数とお届け先を事務局（奥付参照）までどうぞお知らせ下さい。

### ☆「オビラメの会」はいつも新入会を歓迎します☆

イトウ保護グループ「尻別川の未来を考えるオビラメの会」は、会費と寄付金などで運営される市民団体です。みなさまのご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

■年会費 2,000円 ■郵便振替 02720-9-11016 ■加入者名「オビラメの会」

振り込み用紙に住所、氏名、電話番号を明記のうえ、「入会希望」とお書き添え下さい（送金手数料70円はどうぞご負担下さい）。会員期間はお振り込みいただいた日から年度末（毎年5月末）までです。お振り込み後、おおむね1カ月以内に会員証とニュースレター最新号をお届けします。

### 「オビラメの会」ニュースレター 第17号（2004年2月発行） OBIRAME Newsletter No.17 February 2004

- 発行 尻別川の未来を考える オビラメの会
- 編集 平田剛士 FAX 0125-22-7501 PXN04427@nifty.com
- 印刷と発送 吉岡俊彦／石崎秀典
- 郵便振替 ■ 02720-9-11016 加入者名「オビラメの会」
- 「オビラメの会」事務局 ■ 北海道虻田郡ニセコ町富士見65「ライズ」内  
〒048-1501 TEL/FAX 0136-44-2472  
<http://homepage3.nifty.com/huchen/Obirame/index.html>  
copyright 2001-2004 Obirame no kai

水と空気、みどりの大自然  
ニセコが好きだ  
楽しんだあとは川を語ろう

御食事処・酒房

# ライズ

ニセコ町富士見65 TEL/FAX 44-2472  
Email/itou110@estate.ocn.ne.jp